

『あなたが変える裁判員制度 —市民からみた司法参加の現在』

大城聡, 坂上暢幸, 福田隆行 著 同時代社 本体 1,900 円+税

裁判員制度 10 年。市民が創った「裁判員白書」

会員 河崎 健一郎 (61 期)



被告人には真っ黒な、もうドロドロしたようなイメージのオーラが見えて、そのオーラがやっぱり、あー嫌だな、やっぱり来たくなかったなー、でもしょうがないもんなーっていうのを行ったり来たりした。ところが、その被告人を見る目がどンドンどンドン変わっていく自分がいたわけです。法廷の中でどンドン色んなやりとりがあって、自分が変わっていくことが一番俺の中で大きかったです。(50代男性) p.49

本書の一つの眼目は、ふんだんに盛り込まれた裁判員経験者の生の声(第1章)だろう。著者らは一般社団法人裁判員ネットでの10年に及ぶ活動を通じて、650件の裁判員裁判市民モニターを実施し、裁判員制度について考える「フォーラム」を18回も開催してきた。その多年にわたる継続的で粘り強い実践の中で、拾い上げられた裁判員経験者の声は実に多様で、迫力があり、ときに意表を突かれる。裁判員裁判が導入されて10年、この間の裁判員経験者は9万人を超えるという。これは、全国の法曹の数の2倍を優に超える数であり、その数は日々増加している。職業的に裁判に関わる法曹とは異なる新鮮な視点には、刮目すべき視点が多く含まれ、また、本書全体を通じての説得力の根源ともなっている。

続く第2章で改めて裁判員制度の概要が解説され、10年間の実施状況が分析されている。それを踏まえて展開される第3章が本書のもう一つの眼目といえる。そこでは、裁判員ネットでの実践を踏まえた、制度の改善に向けた精緻な議論がなされている。

特筆すべきは、描かれる改善提案の解像度の高さである。裁判員の経験を社会の共有財としていく上での大きな壁となっている守秘義務規定や、裁判員であることの公表禁止規定といった論点について、すぐにも取り入れることのできる改正文案(改正前後の対照表まで!)を示して、具体的な提案がなされているのである。本書は、多数の裁判員経験者とそれに寄り添う弁護士の手による、市民が創った「裁判員白書」といえるだろう。

本書の著者代表の大城聡会員と私は、原発事故の区域外避難者の支援を行う法律家団体と一緒に活動した経験がある。その際に、司法の場での問題解決に限界を感じた私達は、ロビイングなどの立法活動を行い、「原発事故子ども・被災者支援法」という法律の制定に関わった。この法律は衆参とも全会一致で成立したものの、その後の予算措置がままならず、理念法として葬られてしまった。そんな苦い経験を共有している。

しかし本書を読むと、その苦い経験すらも、大城会員の中では昇華され、本気で社会の制度を変えるためには何が必要なのか、考え抜かれた跡が読み取れる。それはおそらく、広く現場の声を集めて体系化すること、改善後の制度を可能な限りクリアな解像度で描ききること、その2つだったのではないかと。本書にそれは結実している。

共に取り組んだ挑戦と挫折の後に、彼が、自身のライフワークである裁判員制度の局面で、見事に一つの答えを出しつつあることに大いに刺激を受けた。